報告

ニュージーランド・カンタベリー 大学滞在記

林 陽一*

1. はじめに

編集委員会の依頼があったので、2001年4月1日～2002年1月16日の間滞在したニュージーランド・カンタベリー大学の滞在記を書かせて戴く。

私の勤務する明治大学では勤続5年以上の専任教員に対して在任中に2度在外研究のチャンスが与えられている。そのうち一回は長期在外研究員（8ヶ月以上1年まで、教授会が認めれば2年まで延長も可能）で、もう一回は短期在外研究員（3ヶ月以上6ヶ月まで）。長期在外研究員手当は360万円である。勿論、本来の給与はボーナスを含めて全額支給される。（ついでに述べると特別研究という1年間の研究休暇（授業、教授会、委員会免除で研究費150万円付きという制度も在任中に2回とれる。これは全学的に人気がある!））

私は7年間勤務したところで長期在外研究に応募し許可された。現在、9年目を理工学部情報科学科で過ごしている。

2. 何故ニュージーランドか？

最初は1990年～1991年に文部省在外研究（若手枠）で滞在した米国を考えた。ところが、すぐ2つの問題に直面した。一つは大学のオフィス事情が悪いということ。私は静かな個室で、竹内まりやのジャズコレクションやショパンのピアノ協奏曲を聴きながら仕事をするのが常である。

在外研究に行く可能性のあるところは事前に実地調査した。ファジィの研究者のところで個室を提供することを確実に了解してくれたのは University of South Florida の Kandel 教授だけであった。ただ、所在地の Tampa は物価が高く2ベッドルームのマンションが一月1600ドル～1800ドルもした。（安全なところ）IEEE Trans. on Fuzzy Systems の Editor-in-Chief の Keller 教授も実は応じてくれたが、専門がかなりずれていた。

ニューラルネットワーク関係で個室を提供することを了解してくれたのは Zurada 教授 (IEEE Transactions on Neural Networks の Editor-in-Chief) であった。ところが、ケンタッキー州の Louisville も物価が高く2ベッドルームのマンションが一月1800ドルした。

これでは家賃だけで20万円がなくなってしまう。9歳の息子もいたので安全上の配慮は絶対条件である。

シンガポール国立大学コンピューティング学部はどうであろうかと Rudy Setiono 教授 (IEEE Trans. on Neural Networks の Associate Editor) に尋ねるとやはり家賃は20万円くらいし、自家用車は日本の3倍ぐらいすると言うではないか！上記は全て筆者を客員教授として受け入れることが条件である。

むむ。。。これは価値観を変えないと駄目だ。先進国でないと良い研究ができないとは限らない。息子に長期間貴重な英語教育のチャンスを与えるのも一つの意義である。従って英語を母国語とするという条件は譲れない。

これはニュージーランドしかない。実はニュージーランドのカンタベリー大学のコンピュータサイエンス学科は1998年に高岡忠雄教授を訪ねて実際に Visiting Professor 用のオフィスもチェック済みであった。そのとき高岡教授は私に“もう Full Professor になったのだから、自分の研究を見つめ直してみたらどうか”アドバイスしてくれた。高岡教授は一流の論文誌に非常に多数の論文をアルゴリズムの分野で出しているその道の第一人者である。

広い部屋を用意する。客員教授とする。ただし、授業などのロードは一切ないと申し出が Head of Department の Dr. Tim Bell よりあった。（記念に一回だけ Computer Science Seminar をやったが質問が山のように来て驚いた。）

教授になって6年経つが、いつも自分の専門に近い大きな研究集団が身近にいるとは限らない。インターネットの時代である。電子図書館を使えば主要な論文誌をチェックしたり、印刷したりすることは容易である。IEEE も amazon.com 顔負けの会議録等のオンラ

Yoichi HAYASHI

* 明治大学理工学部情報科学科

イン販売をやっている。ニュージーランドから遥か彼方にある NAFIPS/IFSA'2001や IJCNN'2001に行っている経済的余裕はない。会議録を数ヶ月遅く見ても致命傷ではない。自分のオリジナリティーを試すのも良い機会である。

3. ニュージーランドとはどんなところ？

ニュージーランドは日本から簡単行ける。但し、これは直行便を使った場合に限る。Air New Zealand は成田からも関空からもオークランド、クライストチャーチにも直行便が出ている所要時間は約11時間。ニュージーランドはオーストラリアのすぐ隣だと思っている人が多いが、違う。オーストラリアのシドニーから南東に飛ぶこと3時間である。クライストチャーチの場所を地球儀でよく見ると南極に近い。札幌と緯度が南北逆さまである。その割には、冬もマイナス7度程度が最低気温でそんなに寒くはない。

私は妻と9歳になる息子を連れて行った。米国と比べると滞在ビザ(Work Visa, Visiting Visa, Student Visa を取得した。)は呆気ないほど簡単にとれる。ビザ申請書(A4で4、5枚)とカンタベリー大学からの招聘状、滞在費の証明になる文書(明治大学長の承認証)が必要書類である。

我々は2001年4月1日SQ997便でシンガポールを経由してニュージーランドに行くことにした。それは、帰りにストップオーバーしてシンガポール観光を目論んだからである。(9・11事件の影響でシンガポールは危険!?と厳格な父に言われ、その計画は実現しなかったが)

ところが、成田からシンガポールは約7時間さらにシンガポールからクライストチャーチは9時間近くかかったのである! 疲れた。

4月2日朝10時頃ついにクライストチャーチに無事到着した。肌寒かった。高岡先生が出迎えてくれた。日本と同じ左側通行なので、すぐ予約したレンタカーに乗って高岡先生の車の後を追いかけた。

空港から15分ほど、大学から歩いて5分のところに約束の素敵な家があった。閑静な住宅街。庭も広いし、綺麗な花、庭木もある。カンタベリー大学のOBの大家さん夫妻と握手し契約手続き開始。契約書は西洋社会では極めて重要な書類である。大家さん(Keith)と私は二人で30分近く確認作業をして署名した。奥さん(Maririn)は大学の日本語学科を卒業しているので、結構 natural な日本語の短い文を話す。(私は下手な英語しか話さなかったが。)

この家はカンタベリー大学の WEB 上の大学新聞で“3ベッドの一軒家を Ilam, Fendarton 地区で求む。

家具付きで家賃は週 NZ\$300 (日本円で15000円) まで”と出して3、4日したら電子メールがきた。私は家に備えられているべき、電気製品、家具などを50項目ぐらいリストにして、所有しているか尋ねた。Keith は家の写真を貼付して殆ど OK との返事を返してきた。即決である。

実際にその家の二階に行ったら驚いた。非常に大きいジェットバス(スパ)付きの風呂があるではないか! シャワーもある。電子メールの説明だけでは解らなかった。勿論、一階に大きいリビング、それに書斎用の部屋もあった。

着いた当日は大学の自分のオフィスにも行ってみた。何とそこは郵便の巢箱、コピー、ファックス、文房具がある部屋の隣の一等地である。若干コピーの音がしたが、こちらも竹内まりあジャズバージョンで対抗した。日本通運の船便がついて空港近くの倉庫で、私のサイン待ちになっている模様。ファックスにサインして5日ほどで日本語ポストスクリプトレーザープリンター、変圧器等は配達された。

翌日は銀行、車、小学校である。ニュージーランド経済は英国とオーストラリアの資本にかなり支配されている。従って、銀行は ANZ (Australia New Zealand Bank) にした。東京、大阪等にも支店がある。Riccarton 支店で普通口座と定期口座を開いた。定期の利率は何と年6.00%であった。もっと現金を持ってこれたらなーと思った。

現金で持ってきたのは200万円であった。入国するとき税関で何か申請するものは? というので約 NZ\$40000 現金で持ってきたと言ったら、係官は久しぶりに仕事が出来たぞとばかり数え始めたではないか! こりゃ時間がかかるので困るなと思った。あつという間に“特別席”ならぬ列の先頭に通された。少しして、Have a good day (ハブ ア グッド ダイ)と言ってくれた。ちなみに現地の小学生は Seven, Eight, Nine, Ten を (セブン、アイト、ナイン、ティーン) と発音していた。私は父親の威厳を保つため長男の発音を日本・米国流の発音に直すよう注意した!?

車は何たって日本製である。クライストチャーチで走っている車の80%は日本製だろう。最初トヨタ・カムの程度の良い中古車を買おうとしたが NZ\$20000 以上もする。本田に行ってみた。排気量3000cc のまだ8000キロしか乗っていない支社長用と称する新品同様のアコードがあった。なんて静かな車だろう。気に入ってしまった。とても買えないので、10ヶ月間のリースにもらった。整備、定期点検、車両保険、自動車保険こみで契約した。割高ではある。だが、売る必要がない。帰国する最後まで乗れる。これで車問題は決着。

次は小学校である。日本語補習校週一回の会場となっている現地の公立の Ilam 小学校に行ってみた。この学校にはなんと日本人の生徒は誰もいなかった。カンタベリー大学の敷地の続きにある。どうもカンタベリー大学へサバティカル(在外研究、研究休暇、sabbatical)で来ている息子が沢山在籍しているらしい。人種のるつぼである。

なんと言ってもカンタベリー大学はノーベル化学賞を受賞した物理学者ラザフォード(Rutherford)教授を輩出したニュージーランドの名門大学である。ラグビーも相当強い。勿論、明治大学より強い。

私は息子が英語をどのように学習していくのかに学問的興味があった。日本で週二回英会話学校に一年間行っていたとて、大した効果はないだろうと内心思っていた。息子が英語の能力テストを受けた。国語、即ち英語は年齢より1年下のクラスと判定された。息子は自分がどんどん小さくなって、周りのみんなが大きくなる夢を見たという。相当なストレスだっただろう。完全な英語漬けである。

しかし、彼は二月も経つとサッカーチームに入って

写真1 クラスメートの Victor 君(左)とサッカーをする息子、優一郎

写真2 モエラキボルダーの海岸ではしゃぐ息子

だんだんとけ込んできて、体で英語を理解し始めた。
〈写真1〉英語の補習授業は週にたった一度なのに。9月の誕生日には沢山の同級生が我が家にプレゼントをもって来てくれた。彼は得意げに“一列になって順番にプレゼントを持ってきて!”と英語で叫んで誕生日会を仕切った。私は安堵した。息子が書いた英語の日記があるのだが、そこには日に日に進歩していく彼の英語力が示されていた。〈写真2〉

4. はるかな白い雲の国

ニュージーランドの人口はたった380万人である。そこに8つの国立大学がある。国の広さは日本の約7割。人口密度は日本の50分の1程度とのことである。

第18回ファジィシステムシンポジウムで私の姿を見て少しふっくらしたのではと思った方も多かった事だろう。この国で何を食べるべきか聞かれたら、骨付きのラムと答えるだろう。本当にジューシーで美味しいのである。高級な Stein Lager Beer を飲みながら食べると絶品である。それとワイン。極め付きは高脂肪のアイスクリームである。

元々、人生のリセットボタンと充電ボタンを同時に押しに行ったニュージーランド。ストレスがないから表情は自然と和らいだのでしょう。事実、少し太ってしまった。(中年になったらビールを飲むのは控えた方がいいらしい。痛風にでもなったら大変だ。)

5. 研究のこと

実はクライストチャーチに着いた当初、朝4時に目が覚めて大学のオフィスに行ったりもしていた。が、自分を律するのは研究より遥かに難しい。マイペースになってしまった。NHKの朝7時のニュースをニュージーランドの衛星放送では朝10時から見られる。これを見てから大学に行くことになった。

夜もNHKの夜7時のニュースをニュージーランドで夜10時に見るため、就寝時刻は自然に遅くなった。

IEEEのTransactionはオンラインで見ていたし、その他国際雑誌、論文誌、国内学会論文誌は目次をFAXで逐次送って貰っていたので研究上の不自由はなかった。WEB上で主要な国際会議のタイトルは把握していたので、滞在中、私の興味のある分野では、はっとするような発表はなかったと思う。FUZZ-IEEE'2001メルボルンは家族で参加しようと思っていたが、予算不足で見送った。

在外研究中は十分に時間があつたが、時間に比例して成果は出なかった。これは研究と教育が車の両輪であるからである。私立大学で教育が重荷でも研究成果の喜びは学生と分かち合ってこそ生き甲斐が生まれる

ことを初めて知った。極端に言えば、教育義務がない期間は研究成果が挙がるようで挙がらない。

ニュージーランドでファジィ・ニューラルネットワークの研究者の第一人者は Auckland University of Technology の Nikola Kasabov 教授である。彼はファジィ・ニューラルネットワークのキラーアプリケーションはバイオインフォマティクスへの応用だと考えている。筆者も全く同感である。実は私も平成12年度には文部科学省・科学研究費・特定領域Cゲノム情報科学で540万円の助成金を受けている。

6. 観光のこと

私はニュージーランドの北島は将来の観光のためにとっておいて、南島に全力投球した。〈写真3〉実際に行って感動したところは、緑と花のガーデンシティのクライストチャーチ、南アルプスを一望する峠アース

写真3 大自然の中、観光を楽しむ家内、まどかと筆者

写真4 フランツジョセフ氷河を探検する筆者家族

写真5 平成14年元旦、高岡教授の別荘の近くの湖でフィッシング。右端が高岡教授。

ーズパス、タスマン海に面する翡翠の産地グレイマウス、氷上ハイクがスリル満点のフランツジョセフ氷河〈写真4〉、マウントクックを映し出す鏡のようなマセソン湖、アウトドアスポーツのパラダイスのクイズタウン、山好きが集まるトレッキング基地のテ・アナウ、北欧を凌ぐ壮大なフィヨルドのミルフォードサウンド、イエローアイペンギンを始めとするエコツアーへの基地のダニーデン、青い山脈を背に鯨を尋ねるカイコウラなどであった。

7. おわりに

私がニュージーランド滞在中にも日本の多くの読者に IEEE Trans. on Fuzzy Systems の査読依頼が幾度となく届いたと存じます。私の Associate Editor の任務は正式には2001年12月31日をもって無事終了致しました。査読を賢明にしてくださった多くの先生方にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

また、クライストチャーチ滞在中、物心両面で支えてくださった高岡忠雄教授夫妻に誌上を借りてお礼申し上げます。〈写真5〉

最後に私が日本に不在中の間、私に替わって講義をしてくださった、東京都立科学技術大学の山口亨先生と広島工業大学の荒木智行先生に深謝申し上げます。

[問い合わせ先]

〒214-8571 川崎市多摩区東三田1-1-1

明治大学理工学部情報科学科

林 陽一

TEL : 044-934-7475

FAX : 044-931-5161

Email : hayashiy@cs.meiji.ac.jp